



様々な夢と期待に胸膨らませながら迎えた令和元年。そんな思いとは裏腹に、国内外において様々な問題が一気に噴出してきたようにも思える。一見、平和で豊かに見える日本も不穏な雰囲気漂い始めている。「京アニ」の悲惨な事件をはじめとして、「あおり運転」「尊属殺人」等、後を絶つことがない。「殺したるか」。が、日常のちょっとしたいざこざに登場してくる日本の現状は、どこか狂っているとしか思えない。

来年はオリンピック開催国として「おもてなし」の年でもある。おもてなしとは「見返りを求めず、相手を敬い丁寧に扱う」ということのように思っているが、これがチップを求めない日本文化の育んだ日本人の良いところだと思っている。はたしてこの心は今に生きているのであろうか。

「おもてなし」の心を海外にアピールしたことを良いご縁として、日本人そのものの日常の人と人とのかかわり方にもしっかりと目を向けていけたらと思うことである。オリンピックが成功するか否かの基準も、ある意味この「おもてなし」の心にあるのではないだろうか。

オリンピックを経済活性化の起爆剤程度に考えているとするならば、日本の文化を汚すことにもなりかねないのではと、危惧されるところである。

改めて「他力」を問う

樹林

昨年十月「真の信心にであつ」と題して他力信心を論じましたが、真宗門徒にとって他力の信心は不可決の要件であると思ひますので、改めて他力思考を話題にさせていただきます。

鈴木大拙先生は、世界に向けて日本仏教を紹介されましたが、晩年九十歳で「教行信証」の英訳に取り組まれました。禅のほか親鸞聖人の拓かれた浄土真宗を高く評価され、浄土教が最知識の後に到達した世界に誇る境地とされました。それは法然上人の念仏を主とするに対し、親鸞聖人は信心を主とする精神世界を開かれたことを意味します。



平成23年 338回
京都から吉崎御坊への御影道中(徒歩)にて(280*₀)参加された時の樹林さんの笠。

「朝な朝な仏とともに起き、夕な夕な仏を抱きて伏す」生活です。

妙好人の生活も、知識ではなく、豊かな感性により信心に生きる生活でした。私共は知識の世界の中に生きているので「至心回向」の信心は、かえって難しいものになっています。仏法を学ぶなかで妙好人の感性を育てることが、門徒に課せられた課題と言えぬのではないのでしょうか。

この頃、切に思つのですが、私共はもっと自然のはたらきに目を向ける必要があるのではないのでしょうか。科学文明のなかで、いつしか人間中心になり、先祖が受け継いできた「朝日に向かつて手を合わせ、自然の恵みに感謝する」つつましい心情が失われた結果、阿弥陀仏の廣大深遠な慈悲を感じ取る心もつすれてしまったように思われます。

私は家庭菜園をやっていますが、作物は自分が作るのではなく自然が育ててくたさるものこの思いを持つようになりました。確かに耕し、水をやり、草をとるなど手入れをしますが、それは自然の育てる働きほんの一部をお手伝いするに過ぎないと考えようになりました。初物は必ず仏前にお供えしておりますが、収穫物は他力の成果として受け取っています。

「このような経験から」自然のはたらきすなわち阿弥陀仏の確信を持つようになりました。自然の働きは他力の働き、すなわち阿弥陀仏と受け止めるようになります。こうして家庭菜園を通じて自然のはたらきに触れ、自然は他力の世界であるとの見方が固まるようになります。

台風が心配された中、

秋季永代経勤まる。



境内には白い萩の花が
こぼれんばかりに咲いてい
ました。

九月二十二日(秋分の日)台風十七号が日本海を北進中でした。大型台風であったためか、早朝から雨風で大荒れでした。

参詣予定の方もこれではお越しいただけないのではと気をもんでいました。時間が経過とともに雨風も穏やかになり、お経を読み始める頃には穏

お天気になってきました。

おかげさまで、多くの参詣の方々にお越しいただくことができました。

午前は住職が法話をいたしました。が、「往生」についての話となりました。パワーポイントを使つての法話でしたが、使いこなせないところがあつて、話に集中できなかった。ので、わかりにくい感じになってしまったのではと反省しております。午後は若院が「慈悲」についての話をさせていただきました。

一人ともまだまだこれから行つたところですが、皆さんの指導を仰ぎながら、精進していきたいと思つております。



今月の掲示板

つづられた幸せで
インスタ疲れ
本当の幸せは
写真映えしない
日常の温かさの中に
光っている。

これは京都の佛光寺に掲示されていた言葉ですが、現代の世相をよくとらえられている言葉だと思ひました。
本物が偽物が見分ける確かな目を仏様からいただきながら生きていくことの大切さを教えられます。
不幸に出会つて初めて見えてくる幸せもあります
が、何気ない日常にこそしみじみと心から喜べる幸せがあるように思ひます。

「報恩講」

真宗本廟において11月21日～11月28日まで報恩講が営まれます。またそれに合わせて全国の末寺でも報恩講が執り行われます。

報恩講は真宗門徒において一年の行事の中では最も重い行事となります。親鸞聖人の遺徳をしのび、共に仏法を聞いて語り合う集いであり、生きていくなかで受けてきたたくさんの「恩」に「報いる」ことに思いを馳せるひとときでもあります。



光受寺は12月8日(日)に執り行いますが、それぞれのご家庭でも「おとりこし」としてお勤めがなされます。

この場を家族全員がそろい、心を一つにできる場としていただけたなら、本当にありがたいことだと思います。

「報恩講」は大事だよ。それは「何故？」その「問い一つ」を残し、伝えることができれば、親としての大きな役目一つは終わったことになるのでは、と思うのです。

ちよつと良い話。

敬老の日。「お母さんどこか行きたいところある」と娘。「墨俣の光受寺へ行きたい」と母。孫も同伴。折しも金曜喫茶日でした。お茶を飲んでいただきながら歓談。

どうやら戦時中名古屋から、「こ光受寺に疎開をされていたらしい。幼いころの忘れられない思い出話が続いたのです。

三世代の水入らずの思いと行動が、とても微笑ましく、また不思議な縁を感じられたことでした。